

フィジー語の接尾辞を伴わない他動詞

susumu.okamoto415@gmail.com

— 342 —

2. 先行研究

先行研究として、Schütz (2014) と Dixon (1988) を取り上げる。

2.1. Schütz (2014)

Schütz (2014) は標準フィジー語の参照文法である。Schütz (2014) によれば、接尾辞形、ゼロ形は特定性や動作のどこに着目するかによって説明できるという。以下、Schütz (2014: 151- 152) を要約する。

ゼロ形においては、潜在的な意味的終着点は特定のである。*E laga na sere* ‘She was singing the song’ という形式は活動に注目しているが、一つの特定の歌が関わっている。ゼロ形はすべての動詞で許容されるわけではなく、*gunu* 「飲む」、*masi* 「こする」、*sava* 「洗う」、*keli* 「掘る」ではゼロ形は許容されない。一方、接尾辞形 *E laga-t-a na sere* ‘She sang the song.’ は終着点に着目している。

2.2. Dixon (1988)

Dixon (1988) はフィジー語ボウマー方言の記述文法であるが、参考になる点も多いので取り上げる。

ボウマー方言においてもゼロ形で現れる動詞は限られており、*dree(-ta)* 「引く」、*cola(-ta)* 「肩に乗せて運ぶ」、*lave(-ta)* 「持ち上げる」、*bili(-ga)* 「押す」、*drewe(-ta)* 「背中に乗せて運ぶ」などの動詞でのみ観察されるという (Dixon 1988: 203)。Dixon (1988: 203) によれば、接尾辞形は達成された事態、ゼロ形は起こりうる事態に用いられる傾向があるという。すなわち、(4)a は決まった結果のある活動を表しているのに対し、(4)b は一般的な活動を表している。

(4) a. *au aa bili-g-a a motokaa yai*
1SG PST push-TR-3SG ART car this 「私はこの車を押した」

b. *era sa bili a motokaa mayaa*
3PL ASP push ART car that 「彼らはその車を押している」

(Dixon 1988: 204 、訳は発表者が追加)

3. 問題提起

Schütz (2014) はゼロ形が許容される動詞に制限があることを主張しているが、羅列的に例を示しているのみであり、その詳細を体系的に記述する必要がある。その機能についても Dixon (1988: 203) で傾向が述べられているのみで、詳細は明らかとなっていない。

4. 面接調査

Schütz (2014: 150- 152) において、ゼロ形の例として挙げられている動詞は (5) に示すとおりである ((5) の訳は Schütz (2014) によるものである)。

(5) *viri* ‘throw’, *dreke* ‘carry’, *coka* ‘pull’, *dree* ‘pull’, *rogo* ‘carry’, *cigo* ‘catch’, *caqe* ‘kick’,
pasi ‘pass’, *dara* ‘put on’, *laga* ‘sing’, *yavi* ‘haul’, *tavo* ‘draw’, *talo* ‘pour’, *tabe* ‘carry’,
vue ‘lift’, *yau* ‘carry’ *yaku* ‘remove’, *yara* ‘drag’, *yavi* ‘haul’

(5) の動詞は、対象の被影響性という点で意味的他動性が高い動詞が多いといえる。そこで角田 (2009: 101) の提案する二項述語階層を利用しながら、意味的な他動性の高低がゼロ形の成立に関わっているか否かを探る。フィジー語の他動詞節で表される動詞を角田 (2009) の二項述語階層に対応させると、表 1 のように示すことができる。動詞の選定については Capell (1968) の記述を参考にした。

表 1: 角田 (2009: 101) の二項述語階層におけるフィジー語の他動詞

1 直接影響	1A 変化	<i>vakamate</i> 「殺す」、 <i>voro</i> 「壊す」、 <i>tunu</i> 「温める」
	1B 無変化	<i>tukia</i> 「たたく」、 <i>caqe</i> 「蹴る」
2 知覚	2A	<i>rai</i> 「見る」、 <i>rogo</i> 「聞く」、 <i>kune</i> 「見つける」
	2B	
3 追及		<i>waa</i> 「待つ」、 <i>qara</i> 「探す」
4 知識		<i>kila</i> 「知る」、 <i>nanu</i> 「覚える」、 <i>guileca</i> 「忘れる」
5 感情		<i>loma</i> 「愛す」、 <i>vinaka</i> 「好き」、 <i>caa</i> 「嫌い」、 <i>domo</i> 「欲しい」、 <i>cudru</i> 「怒る」、 <i>rere</i> 「恐れる」

4.1. 調査方法

発表者が作成したゼロ形の例文を提示し、接尾辞形と同じ意味をあらわすかどうかをコンサルタントに判断していただいた。コンサルタントはフィジー語話者である LG 氏 (男性、1962 年生まれ、2013 年より日本在住) に協力していただいた。

4.2. 調査結果

まず、ゼロ形は「2 知覚」、「3 追及」、「4 知識」、「5 感情」では観察されない (6)a, b。

- (6) a. **au rai na vale* b. **au domo na wai*
1SG see ART house 1SG want ART water
(「私は家を見た」を意図) (「私は水が欲しい」を意図)

「1 直接影響」でもほとんどの動詞でゼロ形は許容されず (7)a、ゼロ形が許容されたのは *caqe* 「蹴る」のみであった (7)b。

- (7) a. **au vakamate na namu* b. *au caze na polo*
 1SG kill ART mosquito 1SG kick ART ball
 (「私は蚊を殺した」を意図) 「私はボールを蹴った」

さらに精査すると、対象に直接影響を及ぼす動詞でも、状態変化を表す動詞ではゼロ形は許容されず (8)a、位置変化を表す動詞でのみ許容されることが明らかとなった (8)b。

- (8) a. **au voro na bilo* b. *au vakau na kaakana*
 1SG break ART cup 1SG send ART food
 (「私はコップを割った」を意図) 「私は食料を送った」

(7)b において *caze* 「蹴る」のゼロ形が許容されたのは、フィジー語において *caze* は対象に対する接触のみでなく、移動も伴うということが語彙的に含意されるからである (Capell 1968: 25)。

以上のことより、ゼロ形は対象の位置変化を伴う動詞でのみ許容されるといえる。前頁の (5) の動詞もほとんど対象の位置変化を表わす動詞である。このことは **theme**³ が目的語の場合にゼロ形が許容されると換言できる⁴。

5. 資料調査

接尾辞形、ゼロ形それぞれの機能の違いを、資料調査によって明らかにする。

5.1. 調査方法

接尾辞形、ゼロ形それぞれについてその統語環境を調査するため、フィジー語で書かれたオンライン記事である *The Fiji Times* の *Nai Lalakai*⁵ の 2016 年 4 月から同年 7 月の全 583 記事 (総語数 314,363 語) から対象となる用例を抽出した。接尾辞形・ゼロ形それぞれの用例を集めるため、**theme** を目的語にとる動詞を調査対象とした。

- (9) *vaakau* 送る, *dreke* 背に担いで運ぶ, *cola* 肩に担いで運ぶ, *dree* 引く, *viri* 投げる, *caze* 蹴る

5.2. 調査結果

2 つの形式の出現数とその統語環境は表 2 のように図示できる (*dreke*、*cola*、*caze* はゼロ形が発見できなかったのを除外してある)。

³ 「ある場所に位置している、あるいはある場所から別の場所へ移動していると捉えられる名詞句」 (Berk 1999: 289)。

⁴ 唯一例外的である *laga* 「歌う」も歌をどこかに届けるものと見なすと、**theme** (的) であると言えるかもしれない。

⁵ 2012 年 3 月 2 日から公開されているオンライン記事。毎週月曜日に更新され、30~40 程度の記事が公開される。

表 2: 2 つの形式の出現数

<i>vaakau</i>	<i>dree</i>	<i>viri</i>		主節	<i>ni</i> 従属節	<i>me</i> 従属節	関係節	名詞句
11	6	3	接尾辞形 (20 例)	<u>13</u>	2	3	1	1
18	4	2	ゼロ形 (24 例)	6	<u>6</u>	<u>5</u>	0	7

表 2 の右側を見ると、接尾辞形は主節の述部として実現する傾向が強いということがわかる (20 例中 13 例、65%)。それに対し、ゼロ形は主節の述部として実現するのは 24 例中 6 例であり、非主節の述部として実現する傾向が強いということがわかる。

ni および *me* とは、節の先頭すなわち拘束代名詞の前に出現し⁶、ある種の動詞の補文節を導入したり、時を表す従属節を導入したりする標識である。今回の調査で、ゼロ形は *ni* 従属節や *me* 従属節に現れる傾向が強いことが明らかとなった (24 例中 11 例、45.8%)。ゼロ形が出現する補文節をとる動詞は (10) のとおりであり、(11)、(12) はその例である。

(10) *bera ni* 「まだ～していない」、*nuitaka ni* 「～を望む」、*tomana ni* 「～し続ける」、*rauta me* 「～すべきである」、*vinakata ni* 「～したがる」、*kaya ni* 「～と言う」

(11) (...) *nui-tak-a tiko ni na bau vakau yani vakatotolo e so na no-drato valelaca*
hope-TR-3SG CNT COMP FUT please send thither quickly 3SG some ART PC-3PA tent
「(...) いくつかテントを早急に送ることを望んでいる」 (apr252016_12_25)

(12) *kaya o kaya niira dree tuu na gone mai na kalasi ono ki na walu, (...)*
say PRP 3SG COMP+3PL draw CNT ART child from ART class six to ART eight
「彼らは子供を 6 クラスから 8 クラスに移していて、(...) と彼は言った」 (apr112016_28_16)

ゼロ形が主節の述部として現れる 6 例中 4 例が (13) のように複数ある述部の 2 つ目以降に実現している。用例が少なくははっきりしたことは言えないため、ここでは例を挙げるに留める。

(13) *oti oya e sa qai vaka-donu-yi na no-na kerekere, ka sa qai vakau*
done that 3SG ASP then CAUS-straight-PASS⁷ ART PC-3SG request and ASP then send
mai vei ratou na matasere na yaca-na, (...)
hither to 3PA ART choir ART name-3SG
「その後、その要求が認められ、そして聖歌隊に名を送り (...)」 (may022016_22_48)

⁶ 3 人称単数の *e* の前に出現した場合、*e* は削除される。

⁷ 本発表では を他動詞派生接尾辞と見なし TR とグロスを付している。しかし、*-Ci/-Caki* は目的語標示と共起しなければ受動化としても機能する。ここでは受動化として機能しているため PASS というグロスを付す。

6. おわりに

今回の面接調査および資料調査で明らかとなったことは (14) の 2 点である。

(14) a. ゼロ形として現れる動詞は対象の位置変化を伴う動詞である。このことは換言すれば、目的語の意味役割は *theme* に限定されるということである。

b. ゼロ形の実現する統語環境に偏りがあり、主節の動詞としてよりも、名詞句や従属節の述部として現れる割合の方が高い。

(14)a について、ゼロ形の目的語が *theme* に限定される理由は、Schütz (2014) の指摘している動作の着目の仕方によって説明できる。Schütz (2014: 151) によればゼロ形は動作の活動に着目するという。状態変化を表す動詞 (すなわち目的語が *patient*) の場合、表現される事態は *telic* なものである。意味的に時間的終着点を含意するため、活動のみに着目することはできない。一方、位置変化を表す動詞の場合 (すなわち目的語が *theme*) の場合、時間的終着点を含意しない。そのため、活動そのものに着目する形式としてゼロ形が存在する。

(14)b について、ゼロ形は *bera ni* 「まだ～していない」、*nuitaka ni* 「～を望む」、*rauta me* 「～すべきである」、*vinakata ni* 「～したがる」といった動詞の補文節で観察された。これらの動詞はすべて未実現の事態を表す。このことは Dixon (1988: 203) の指摘するゼロ形の「起こりうる事態に用いられる傾向」に合致する。ただし (14)b はあくまで傾向であるということを強調しておく。

今回は得られた例が少なかったため、主節の述部として現れるゼロ形が動作に着目しているかどうかを分析することができなかった。今後は用例数を増やし主節のゼロ形について考察する必要がある。

【グロス略号一覧】 -: morpheme boundary / +: fusion / 1, 3: 1st, 3rd person / ART: article / ASP: aspect / CAUS: causative / CNT: continuous / COMP: complementizer / FUT: future / PA: paucal / PASS: passive / PC: possessive classifier / PL: plural / PRP: proper article / SG: singular / TR: transitive suffix

【参考文献・URL】 Berk, Lynn M. (1999) *English Syntax: From Word to Discourse*. Oxford: Oxford University Press. / Capell, Arthur (1968 [1941]) *A New Fijian Dictionary*. 3rd Edition. Suva: Government Printer. / Dixon, Robert Malcolm Ward (1988) *A Grammar of Boumaa Fijian*. Chicago: University of Chicago Press. / 岩佐嘉親 (1985) 『フィジー語入門』東京: 泰流社. / Milner, George B. (1956) *Fijian Grammar*. Suva: Government Press. / Schütz, Albert J. (2014) *Fijian Reference Grammar*. Honolulu: Pacific Voices Press. / 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版』東京: くろしお出版. / Fijian | Ethnologue: <https://www.ethnologue.com/language/fij> (最終閲覧日 2016/10/05)

【調査資料】 The Fiji Times Online Nai Lalakai Online: <http://nailalakai.fjtimes.com/>